

次世代育成施策の実施状況

1. びわ湖ホール 音楽会へ出かけよう！（ホールの子事業）（23 年度～）

(1) 事業の実施状況（28 年度）

県内の小学校・特別支援学校等の児童・生徒をびわ湖ホール大ホールに招き、オーケストラと声楽アンサンブルによる音楽公演を開催した。また、参加に要する交通費の補助を行った。

日 時：平成 28 年 6 月 6 日～10 日 （午前・午後、計 10 回公演）

場 所：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール

指 揮：下野竜也

管弦楽：京都市交響楽団

独唱・合唱：びわ湖ホール声楽アンサンブル

参加者数：115 校 8,014 人

<過去の実績>

平成 23 年度（1 日 2 回公演）	26 校 2,611 人
平成 24 年度（2 日 4 回公演）	46 校 4,222 人
平成 25 年度（3 日 6 回公演）	58 校 5,181 人
平成 26 年度（4 日 8 回公演）	89 校 6,755 人
平成 27 年度（5 日 10 回公演）	112 校 8,367 人
平成 28 年度（5 日 10 回公演）	115 校 8,014 人

児童の感想

「生の演奏は迫力があって感動した。いろんな楽器があってびっくり。」

「たくさんの人と一緒に歌えて楽しかった。」

先生の感想

「生の音を実際に見て聴いて、全身に音楽の楽しさを感じていた。」

「本物に触れる貴重な経験ができ、子どもの興味や夢にもつながったと思う。」

(2) 事業の成果、課題、今後の取組等

成果

- ・楽器の音や歌声に直に触れることで、音楽的な視野が広がり子どもたちの舞台芸術への関心を高め、感性を育む機会となった。

課題

- ・より多くの子ども達が体験できるよう、未参加校への参加を促すことが必要。
- ・遠方の地域の学校が参加しやすい取組が必要。

今後の取組

- ・市町教育委員会との意見交換や校長会でのPR。
- ・県教育委員会とも連携し、市町の教育関係者や教職員への事業視察の呼び掛け。
- ・他の校外学習と組み合わせての参加の案内。

2. 滋賀次世代文化芸術センターの運営補助（23年度～）

(1) 事業の実施状況（27年度）

感性豊かな文化の担い手の育成および多様な人々と豊かに関わる力の育成を図るため滋賀次世代文化芸術センターが行う連携授業などの事業運営費に対して助成を行った。

① 体験

文化施設、芸術家等と学校等を結び、子どもたちが文化芸術を体験する連携授業を実施

○実施件数:189件・学校数:53校・生徒数:11,200人

小学校:34校(7,912人)、中学校:9校(1,720人)、高等学校:1校(1,073人)、特別支援学校:6校(418人)、適応指導教室:2校(35人)

別室登校分:小学校:1校(10人)、中学校:1校(32人)

()内は生徒数、小学校1校重複

② 育成

ア 登録ボランティア数 82名

内訳

県教育委員会「滋賀の教師塾」27名、滋賀大学 2名、京都橘大学 22名、その他 31名

イ 龍谷大学との連携

体験プログラムへの出演等

③ 研修

ア 夏季研修会

期 日 : 平成27年8月6日 会場: MIHO MUSEUM、県立陶芸の森

対 象 : 学校関係者、文化施設関係者、講師の芸術家等

参加者数: 59名

イ スタッフ等研修会

期 日 : 平成27年12月15日 会場 : 守山市生涯学習・教育支援センター

対 象 : スタッフ、ボランティア

参加者数 : 16名

ウ スキルアップミーティング

期 日 : 平成27年12月25日 会場 : 県立陶芸の森

対 象 : 文化施設関係者、講師の芸術家等

参加者数 : 26名

④ 連携・協働

ア 教育委員会等との連携

- ・教育委員会生涯学習課「学校支援メニューフェア」への出展
- ・県観光交流局との連携によるミシガン大学の研修生の受け入れ
- ・東近江市教育委員会、近江八幡市教育委員会へ研修講師派遣

イ 県外との交流

- ・福井県坂井市教育委員会視察受入れ
- ・創造都市ネットワークへの参加

(2) 事業の成果、課題、今後の取組等

滋賀次世代文化芸術センターが行う連携授業により、多くの子どもたちに本物の文化芸術に触れ、創造する機会を提供することができた。

さらに、子どもが本物の文化に触れる機会の充実を県全域へ発展させる必要がある。

3. 美ココロ・パートナーシップ事業（27年度～）

(1) 事業の実施状況（27年度）

様々な事情により通常学級に通えない（別室登校・不登校）児童・生徒等を対象に、文化芸術体験プログラムを提供し、様々な芸術に触れる機会を提供することにより、子どもたちの豊かな心をはぐくむとともに、若手芸術家を本事業の講師として活躍できる「美ココロ・パートナー」として育成した。

① 美ココロ・パートナーシップ会議の開催

次世代の育成に関わる文化関係団体、文化施設、大学、文化コーディネーター、芸術家、行政等によるネットワーク会議（パートナーシップ会議）を開催し、本事業の検討・検証の場とするとともに、次世代育成のための情報交換や連携強化の場とした。

第1回 平成27年7月30日

第2回 平成27年12月15日

第3回 平成28年2月15日

②美ココロ・パートナーシップ補助金

連携授業により、多くの子どもたちに本物の文化芸術に触れ、創造する機会を提供し、また、文化ボランティアの育成、教員研修等でノウハウと実績のある滋賀次世代文化芸術センターに対し、様々な事情により通常学級に通えない（別室登校・不登校）児童・生徒等を対象に文化芸術体験プログラムを提供するとともに、若手芸術家を本事業の講師として活躍できる「美ココロ・パートナー」として育成するための補助を行った。

○補助先 滋賀次世代文化芸術センター

○参加校 守山市立小津小学校、守山市立守山小学校、近江八幡市立安土小学校、栗東市児童生徒支援室、栗東市立栗東中学校

○参加生徒数 延べ37人

○事例研修会の実施

期 日：平成27年12月15日 会場：守山市生涯学習・教育支援センター

対 象：学校関係者、文化施設関係者、講師の芸術家等

参加者数：54名

○美ココロ・パートナーの育成

陶芸家：3名、音楽家：3名

(2)事業の成果、課題、今後の取組等

滋賀次世代文化芸術センターに補助することにより、不登校児童など内面に課題を持つ子どもたちが文化芸術に触れる機会をつくることができた。

さらに、子どもが本物の文化に触れる機会の充実を県全域へ発展させる必要がある。

4. 滋賀県次世代文化賞（23年度～）

(1)事業の実施状況（28年度）

国内外の水準の高いコンクールや展覧会等で最優秀賞等の成績を修めるもしくはその活動において将来を一層期待される個人または団体（おおむね19歳以上30歳以下）に贈られる賞。若手芸術家の育成・支援を目的として平成23年度より創設。

平成28年度受賞者 西川 礼華（美術）、久末 航（音楽）

～過去の受賞者～

平成23年度	藤井俊治（美術）、松本大樹（音楽）
平成24年度	北川安希子（美術）、西川茉莉奈（音楽）
平成25年度	中川彩（音楽）、中嶋俊晴（音楽）、藤永覚耶（美術）
平成26年度	杉本 優（音楽）、唐仁原 希（美術）
平成27年度	岡本 里栄（美術）、高岸 卓人（音楽）

選考方法

市町長、市町教育長、県本庁各課、文化団体、県内大学等（関西2府4県、中部8県、首都圏1都3県の大学）より推薦を受け、滋賀県文化賞等選考懇話会の意見を聞いて受賞者を決定する。

受賞者には、賞状（盾）および銀杯を贈呈するとともに、作品・演奏等を発表する機会を提供（文化プログラムフェスティバル事業次世代芸術フェスティバル）。

(2) 事業の成果、課題、今後の取組等

成果

- ・若手芸術家を顕彰することにより、今後の活動の励みとなった。

課題

- ・特定の分野に偏ることなく、幅広い分野から推薦されるべきである。

今後の取組

- ・今後、推薦団体の見直しについて検討する。

5. 文化プログラムフェスティバル事業次世代芸術フェスティバル（平成28年度新規）

(1) 事業の実施状況（28年度）

発表の機会の提供および国内外で活躍する芸術家の指導等により、県内若手芸術家のレベルアップを図り、東京オリパラ・国体に向け、これからの滋賀の文化を担う若手を育てるとともに、地域とのつながりを強め、若い世代から滋賀の特色ある文化を発信することを目的に、びわ湖☆アートフェスティバルを開催。次世代文化賞受賞者等が参加。

主 催 滋賀県、公益財団法人滋賀県文化振興事業団、
文化プログラムフェスティバル事業実行委員会

共 催 公益財団法人びわ湖ホール

協 力 株式会社しがぎん経済文化センター

内 容

① びわ湖ホール会場 平成28年9月18日(日) <参考：H28参加者数 2,200人>

○若手芸術家による公演

次世代文化賞受賞者の公演、県内ジュニアオーケストラと国内外で活躍するアーティストとの共演等

○実技指導セミナーの開催

若手芸術家など若者を対象に、日本を代表する芸術家による実技指導セミナーを実施し、フェスティバル当日に成果発表公演を実施

○アートフリーマーケットの開催

若手作家による作品の展示販売

② 近代美術館会場 平成28年8月30日(火)～9月4日(日) 6日間

<参考：H28参加者数 720人>

○美術作品展示

「次世代文化賞受賞者展」の開催

○ワークショップの実施

展覧会期間中(9/3)に、出展者によるワークショップを開催

③ 学校会場 <参考：H28参加者数 1,100人>

○ 作品展示・ワークショップの実施：若手芸術家の活動の場の提供や地域との連携強化をめざし、地域の方々や子どもたちにとって身近な場所である学校での作品展示、児童を対象とするワークショップなどのアート活動を実施

・ 大津市立仰木の里東小学校×成安造形大学学生 平成28年9月5日～16日

・ 東近江市立布引小学校×画家・吉田友幸 平成28年10月11日～21日



(2) 事業の成果、課題、今後の取組等

成果

・若手芸術家等が広く県民に向けて自身の活動を発表する場を設けることができた。

また、単なる発表だけでなく、ワークショップを開催するなど参加者との交流の場を設けることができた。

・普段は個々に活動している若手芸術家が共演することで、若手芸術家間のネットワーク形成を促すことができた。

課題

・来場者は出演者の関係者の割合が多かったため、より多くの一般県民に取組を知ってもらうことが課題である。

・若手芸術家側、お客さん側双方にとって価値のある事業とするため、取組を広げ発展させていく必要がある。

今後の取組

- ・公演内容や広報を見直し、より効果的に実施できるよう実施方法・形態を考える。
- ・学校会場開催地を公募で募るなど、より参加しやすい事業となるよう工夫する。

6. 新生美術館見本市事業（「美の糸ローアートにどぼん！」） （26年度～）

(1) 事業の実施状況（28年度）

「美の滋賀」の入り口・拠点として平成32年春にオープン予定の新生美術館のコンセプトを視覚化し、多様な美の魅力などを親子連れで気軽に楽しめるワークショップを中心としたフェスティバルを、県内を中心とした団体・施設・作家の方々など幅広い参画を得ながら開催。

日 時：平成28年11月3日（木・祝）

場 所：滋賀県立近代美術館および周辺の公園内

プログラム：31プログラム（ワークショップ28、ライブパフォーマンス3）

参画者数：27団体・人

来場者数：2,600人

（これまでの実績）

平成26年度	実施プログラム	22	来場者数	1,700人
平成27年度	実施プログラム	28	来場者数	2,500人



(2)事業の成果、課題、今後の取組等

成果

- ・ 普段近代美術館に来られない小さな子どものいる家族をはじめ、多くの県民が美術館に足を運び、新生美術館への期待感を持っていただく機会となった。
- ・ 県内の作家や大学等の関係者による実行委員会を組織するとともに、ワークショップには多くの作家や団体に出展してもらうことで、新生美術館の開館に向けた幅広いネットワークの構築につながった。

課題

- ・ 来年度より近代美術館が休館するため、開館までの3か年は美術館以外の会場で開催を継続していきたいと考えている。これまでの実績を活かしつつ、新生美術館の開館に向けてより一層の期待感の醸成や地域との連携を図ることが必要である。

7.「学校にアートがやってきた」推進モデル事業（27年度で終了）

(1)事業の実施状況（27年度）

身近な場所で美術作品の展示を進め、鑑賞教育につなげるとともに、若手芸術家の育成支援を行うため、空き教室を若手芸術家等のアトリエとして使用するとともに、若手芸術家の絵画、造形作品を小学校に一定期間貸与し、校内の踊り場や廊下等で作品発表の場の提供を行う。

目的① 若手芸術家の育成支援

芸術家の活動場所の提供（作品の制作場所・材料、発表の機会の提供）

子どもたちとの交流により気づき、ひらめきを得ることにより作品の幅を広げる

目的② 子どもたちの鑑賞教育

子どもたちが身近な場所で芸術に触れられる機会をつくる。芸術の鑑賞の仕方、楽しみ方を学ぶ

※若手芸術家と子どもたちがお互いのやりとりのなかで双方向に刺激し合い、一緒に高まっていくことを狙う

(2)事業の成果、課題、今後の取組等

成果

- 事業に参加した学校、芸術家にはおおむね満足いただけた
- 半数以上の芸術家が「作品発表の機会ができた」「地域や関係機関との連携が図れた」と感じており、事業を通して活動の場の提供・地域とのつながりを作るという面で一定の支援ができた。

- 子どもたちの独創的な発想による作品づくりや作品を見た時の感想は芸術家にとっておおいに刺激を与えたと考えられる。アンケートでも約半数が「今後の制作に役立つ気づきがあった」と回答しているほか、「今回のワークショップで使った制作方法を自分の作品作りに取り入れてみたい」「子どもたちはこんなふうに感じるんだなと勉強になった」という感想を芸術家から直接いただいている。
- 学校からは通常の図工の授業ではなかなか経験できない体験ができたことを喜ぶ声が多く、子どもたちの鑑賞教育という面においても一定の効果があったものと考えられる。

課題

○広報

「当事業が自身の広報につながった」と回答した芸術家は30%（13人中4人のみ）であった。一部TVや新聞で取り上げていただいたものの、芸術家の今後の活動につながるような広報にまではつながっていない。

○学校と芸術家の希望のすり合わせ

アンケートの中に、「図工科のネタ探しとして利用された部分がある」という回答があった。事業の実施にあたっては、設備や授業との兼ね合いなどもあるため、学校にとっても芸術家にとっても納得できるような事業とすることが課題である。